“atavism”からの救済

『夜はやさし』と『エデンの園』における父子の確執とキャサリンの役割

森田司

はじめに

『エデンの園』(*The Garden of Eden*, 1961)はアーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)が 1940 年代半ばから 50 年代初頭にかけて執筆し、彼の死後に出版された長編作品である。夫デイヴィッド(David)と妻(Catherine)の性役割交換や夫婦が出会った女性マリータ(Marita)との三角関係が展開されるとともに、作家であるデイヴィッドは新婚旅行紀の執筆を中断し、父親と共に幼少期を過ごしたアフリカでの体験を題材にした短編に着手する。一連のアフリカものの短編の中でも、デイヴィッドが最後に取り組む象物語では、幼いデイヴィッドが密かに友情を感じていた象を残酷に殺してしまう父親に対する幻滅が描かれており、多くの研究者の注目を集めてきた。一方、象物語よりも前にデイヴィッドが執筆したその他のアフリカものに注意を向けてみると、そこに登場する父親は非常に不可解かつ不鮮明に描かれており、デイヴィッドは父親が行ってきた様々な悪事を美化していることがわかるのだが、この点についてはこれまでにほとんど指摘されていない。

なぜデイヴィッドの父親の描き方が大幅に変化するに至ったのか、この点はF・スコット・フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald)の『夜はやさし』(*Tender Is the Night*, 1934)における父親描写との比較により解消される。２作品の関連性については、これまでに多くの研究者が指摘しており、例えば、ロバート・E・フレミング(Robert E. Fleming)はヘミングウェイが『夜はやさし』に受けた影響を列挙しているものの、父親の描写に関しては、ヘミングウェイが独自に書き加えたテーマであると述べている(357)。フレミングによる指摘は、『夜はやさし』における父親のテーマが軽視されていることを端的に示しているが、伝記的事実に目を向けると、1931 年にヘミングウェイはフィッツジェラルドの父親の死に際して、親の死という重要なテーマを慎重に扱うように手紙で忠告しており(*Selected Letters* 340)、その後に『夜はやさし』が出版された経緯がある。そのため、ヘミングウェイに限らず、フィッツジェラルドも自身の作品における父親のテーマに重要性を見出していたと仮定することについては一定の妥当性があり、彼が後のヘミングウェイの作品に影響を与え返しているとも考えられる。さらに、『夜はやさし』の再検討は『エデンの園』に新たな読みをもたらし、夫の男性性や作家性を脅かす悪女として考察されてきたキャサリンの再評価に繋がる。

父親を美化するデイヴィッド

『エデンの園』における父親の死に関して、具体的に何が起きたのかについては明言されていないものの、17 章においてデイヴィッドは父親が悪と友達のように付き合っていたと回想し、“David thought, and evil, when she poxed him, never knew she’d scored.” (146)と語られる。ここにある動詞“pox”は OED によれば、相手を梅毒に感染させること、転じて、相手を破滅させることの比喩であり、1900 年頃には既に、もっぱら後者の意味で使われるようになっているため、日本語版においても同様に解釈されている(沼澤 195)。しかしながら、父親がアフリカ人既婚女性と性的関係にあることが 22 章の象物語の中で暗示されており、デイヴィッドの語りにある“pox”は、文字通り父親の梅毒感染を意味していると読み取ることが可能になる。つまり、17 章時点のデイヴィッドは不倫が原因となった父親の死を、あたかも美談のように語っていることになる。

18 章では、父親がアフリカで起きた暴動を鎮圧しに向かったエピソードをもとにした短編について、父親が極めて残酷な手段を講じた可能性が示唆されており、原稿を読んで激しく動揺したキャサリンは、デイヴィッドの父親やこの物語を書いたデイヴィッド自身を痛烈に批判し、原稿が書かれていた子供用ノートを引き裂いてしまう。それに対してデイヴィッドは“It was a very odd rebellion”と冷ややかに述べており(157-58)、象物語に着手する以前のデイヴィッドが父親の悪事を全く直視していないことを読み取ることができる。象物語に関して、ローズ・マリー・バーウェル(Rose Marie Barwell)は、デイヴィッドがこれまでに触れようとしてこなかった父親との過去を語るようになっている点を指摘している(101)。バーウェルの主張を言い換えるならば、デイヴィッドはトラウマの源泉である幼少期の父親との象狩り体験から距離を取り続けていたことになり、その手段として彼は父親を美化し続けていたのだと考えられる。

キャサリンによる“atavism”からの救済

『夜はやさし』の主人公ディック(Dick)の父親に関しては、作品内で言及される場面が非常に限られているため、これまで多くの考察の対象とはならなかったが、父親が息子に多大な影響を与えていることが作品を通して示されてい

る。ディックの父親は貧しい教区で牧師をしており、彼は父親の苦労を見て育ったために金銭欲が芽生えたと語っている(261)。そのため、ディックは不自由のない暮らしのために古い規範から逃れようとすると同時に、父親から受け継ぐはずであった善性との乖離に苦悩する様子も描かれている。例えば、父親の訃報を受け、ディックの幼い頃の記憶がフラシュバックする場面において、彼はこれを“atavism”であるとして一蹴し、父親との思い出に浸ってしまわないように必死に踏みとどまろうとする(263)。また、ディックが牧師の職を父親から継がずに精神科医になったことも、先述した理由のためであると考えられるが、一方でディックは作中を通して聖職者の役割を果たそうとしており、Book 1 では自身の性質を“apostolic”と形容し(34)、Book 3 においては、妻のニコル(Nicole)が新しい恋人ともにディックの元を去る際に“papal cross”を切って２人を祝福する(400)。

『エデンの園』におけるデイヴィッドの回想は、ディックのものとは極めて対照的に描写されている。17 章のデイヴィッドは短編に登場させるために父親を思い出そうとした結果、父親の幻と対面する。彼は自ら進んで父親の幻に耽溺しようとしており、ディックの言葉を借りるならば、彼は“atavism”に陥っていることになる。さらに注目すべき点はデイヴィッドが自力で現実に戻っているわけではなく、キャサリンが設置した鏡に自分の姿しか鏡に映っていないことに気が付くことによって、デイヴィッドが現実に引き戻されていることである。キャサリンはこの鏡について過去に“awfully critical”と述べており(133)、鏡を通したキャサリンの批判によってデイヴィッドは我に帰ったのだと解釈することができる。さらに、先章で取り上げた暴動鎮圧の短編に関する批判は、デイヴィッドが象物語を書けるようになるきっかけを与えていたと考えることができる。それまでデイヴィッドによって頑なに美化されていた彼の父親はこの瞬間に初めて否定され、彼がトラウマに触れないようにするために築いた壁が破壊される。実際にデイヴィッドはこの場面の直後かつ同じ 18 章内で象物語に取り掛かっており、以降のデイヴィッドは父親の不倫や残酷な狩りを直視できるようになっているのである。

さいごに

善良な牧師のディックの父親と、残虐なハンターであるデイヴィッドの父親は一見すると正反対の人物であり、それ故に比較検討されることがなかったが、息子の精神や振る舞いに多大な影響を及ぼしていた点において共通している。父親がデイヴィッドに与えていた影響は、これまで研究の対象となっていた象物語ではなく、象物語を書くに至るまでの過程にこそ描かれているのである。過程に注目することでもたらされた新たな読みは、なぜデイヴィッドが象物語を書けるようになるのかというさらなる疑問を現出する。この疑問は『夜はやさし』における父子の関係を分析した上で、デイヴィッドの書いた短編群の全体を見渡すことによって初めて解消されるのである。これまでキャサリンはデイヴィッドに新婚旅行記を書かせるため、アフリカものの執筆を妨害する悪女として解釈されてきたが、むしろキャサリンこそがデイヴィッドの成長を促す役割を担っており、デイヴィッドの“atavism”を象徴する子供用ノートを引き裂いたことにより、象物語の執筆を可能にしたのだと解釈することが可能になる。

参考文献

Burwell, Rose Marie. *The Postwar Years and the Posthumous Novels*. Cambridge UP, 1996.

Fitzgerald, F. Scott. *Tender Is the Night*. Scribner, 2019.

--- “The Death of My Father.” *The Princeton University Library Chronicle*, vol. 12, no. 4, summer 1951, pp. 187-89. Princeton University Library.

Fleming, Robert E. “*The Garden of Eden* as a Response to *Tender Is the Night*.” *Hemingway's* The Garden of Eden: *Twenty-Five Years of Criticism*. Eds. Suzanne del Gizzo and Frederic J. Svoboda. The Kent State UP, 2012.

Hemingway Ernest. *The Garden of Eden. Scribner*, 2003. 『エデンの園』沼澤洽治訳、集英社、1990 年。

--- *Selected Letters*: 1971-1961. Ed. Carlos Baker. Scribner, 1981.

Murphy, George D. “The Unconscious Dimension of *Tender Is the Night*.” *Studies in the Novel*, vol. 5, no.3. fall 1973, pp.314-23. John Hopkins UP.

“Pox, *v*.” *Oxford English Dictionary*, 2nd ed., vol.12, Clarendon Press, 1989, p. 267.

Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. University of Nebraska Press, 1990.